
化身

ボロズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
化身

【Nコード】
N0080Q

【作者名】
ボロズ

【あらすじ】
短編です。読んでみてください。

「変わらぬものなどない。」

それは俺が導いた答えだった。人とは変わった生き物だ。自分の出した答えが絶対と信じ、人に押し付ける。人生はそういったものではないと知っていながら…。

俺はその時、恋をしていた。もちろん、季節は冬だったから夏のような恋ではない。本当に風が吹けば消えてしまうような恋だった。

皆、驚くかもしれないが、出会いは俺からのナンパだった。もちろん、普通のときには声をかけないよ。そんな度胸はありません。

1人で居酒屋にきている女なんてここ最近見たことなかった。だいたい男と一緒にいる。普通に会合の可能性は今はない。だからこそ、出会い系などがやっているのだろう。この世界は変わってしまった。四文字熟語だと…そう、「諸行無常」。これがぴたり。

俺は1人でぶらぶら歩いていた。

お金もないし、本屋やスーパー、立ち読みのためにコンビニにやるだけだ。

勉強しなければならない身分だが、なぜか身が入らない。こういったときは無駄にぶらぶらしている。たまにTUTAYAとかにも行くが、朝、返しに行くのが面倒で最近はかりてもいない。早く、春よ来い。

そうこうしている間に外は真っ暗だ。そりゃ当然だ。昼の1時まで

寝ていれば。

午後6時そろそろカップルが多くあらわれる時間だ。俺にはそんなものはいたことがないからたいてい睨む。そして、殴る。頭の中でね。外でやったら犯罪だ。

彼女は彼氏なんて連れていなかった。かわいい感じではないし、派手な感じでもない。今は若くてかわいい子がブーム。一回見たら忘れられないような女の子は芸人ぐらいだ。そうは言っても彼女は何かを持っていた。だからこそ、彼女にひかれたのだ。今思えば止めておけばよかったと思っている。

勘違いしないでほしいが、俺はストーカーじゃないよ。そんなことするぐらいなら、アイドルの写真なんかをインターネットで探せばいい。その後は言わなくても分かるよな。便利な世の中になったもんだ。

近所の居酒屋。最近は随分とおしゃれになっている。友達と一緒に来た時もここに彼女を連れてもおかしくはないなと思った。ということ彼女が居酒屋の前で止まっているときに声をかけた。悲しいよな。男から声をかけないとはじまらない。一部の例外を除いてな。

「こんにちは。いや、こんばんはのほうがよかったかな？」
「誘うにはこんにちはは駄目じゃない？」

まさかの駄目だし。本当にこういうときには頭が真っ白になる。

「あら、ナンパじゃないの？少し飲んで帰りましょうか。それとも違う誘い？」

今考えれば、むちゃくちゃな文章。俺はパニックっているし、それに…。少し考えてほしい。俺は彼女がいない歴22年なんだ…。

「いえ、少し飲みませんか？というお誘いをしようかと…。すみません。僕が年下みたいですね。風貌は女子大生かと思ひまして…。」

「まだ私もいけるわね。もう三十路よ。それに「風貌」なんて使う人初めて見た。じゃ、入りましょう。」

「えっ、いいんですか？」

「何のために誘ったの？あなたは馬鹿？」

そういつて彼女は店に入っていた。俺は舞い上がっていた。初めてナンパで成功を収めたのだから。でも、そうは問屋が卸さない。相手は伊達に年をとっていない。俺はこの時すでに、愛という名の化身を見抜くことができなかった。

「じゃあ、注文しましょう。安心して。割り勘にするから。」

よく知っていらっしやる。そう思った。

「まずはビールでいい？」

「はい。大丈夫です。」

「じゃあ、他はこっちで頼むわね。」

まずはビール。今では死語かもしれない。最近はビールで乾杯しない人も多くないようだ。それは若者の話だけ…。

「割といい雰囲気。最近はこの店が増えているのかしら。個室みたいな感じの…。」

「いや、店によると思いますよ。僕もここに初めて来たとき、びっくりしました。チェーン店でもこんな店があるとは思っていませんでしたから。」

「ふん…。それは置いといて…。」

置いとくんかい！

「その敬語止めない？年上だけどそんなのいいから。」

「いや、でも…。」

「ナンパして言える身分かしら？」

「分かった。俺の名前は上田ハル。君は？」

「田中良子。夫は海外出張中。」

こちら。

「少し不味いんじゃない？最近ではこういうのも…。」

「浮気？」

「うん…。誘っておいておかしいけど…。」

「大丈夫大丈夫。ばれたって何もしていないんだから。」

どこからが浮気なんだろうか？

それは今でもいろいろともめるだろう。「諸行無常」とはいつても人間の欲の形は変わらない。

それから、俺と良子は2時間ぐらい飲み続けた。

少し、頭が重いかないというぐらい。俺はそんなに飲んでいない。話したことは普通の学生生活と彼女の仕事、他にはそうだな…。テレビのことが一番多かったかもしれない。

その話が終わりさしかかった所、俺はこの後のことを考えていた。

まあ、そんなものは彼女はお見通しだった。

「これから、どうしようか？」

「はい？」

俺は帰って何しようかと考えていた。彼女には夫がいるし、俺自身、彼女はおしゃべりをするほうだと思っていたが、聞くほうだった。おしゃべりは苦手だ。本ばかり読んでいるからね。

「まだ、帰りたくない……。そういつても通じるかな？」

さて、この時も頭が真っ白になった。童……いえ、失礼。経験のないものにはづらい選択だ。初めての恋が浮気。まあ、主婦の方々は喜ぶだろうがな。

「通じる通じないの問題でないよ。普通は？」

「ふ〜ん。あなたは真面目なんだ。」

そう言われるとすごく引きとめなくなる。だって、男の子だもん。

「カラオケでも行こうか？」

「う〜ん、そこじゃあ、ちょっとね。私が決めていいかな？」

「分かった。」

店の支払いを済ませ、彼女は俺の手を引いて歩き続けた。すごく胸の鼓動が速い。

本を読んでいる俺はこれは恋ではなく、愛なんだと思うようになっていた。

ついたところは当然、ラブホテルだった。
俺が言えることではないが…。

なんでこんなに緊張するのか？

それは今でも不明だ。

人間の心には分からない部分がたくさんある。

その後は言わないでいいよね。もちろん、うまくできなかった。でも、お互いを知り合うことができたように思う。出る前にちゃんとアドレスを交換した。それにしてもあの音が気になる。カチャカチャ。

それは数日後に発覚した。

今日は学校に行っていた。授業中に電話がかかってきた。

「ごめん。少し話があるんだけど…。今日会える？」

「午後からなら大丈夫。」

「大学近くの駅で待ってて。」

「分かった。」

なぜだろう。初めてのお誘いのはずなのにすごく嫌な予感がした。

彼女はすでに待っていた。

「待った？」

「いや、そんなに…。じゃあ、行きましょうか？」

「どこに…？」

「私の家よ。」

頭が痛くなってきた。

電車の中では何も話をしていない。

すると、どこかに行ってしまったくなりそうだからだ。

そうこうしている間にも家についてしまった。

「ここが私の家よ。」

「大きいね。」

他にどういふのだ？自分は処刑台に自ら登りに行っているようなものなのだから、答えがこうなるのは仕方ないと思う。しかし、彼女は前よりも元気になっているような気がする。

「ただいま。こちらが…。」

「ハル君かね。私は田中晴喜だ。入りたまえ。」

彼女はにこにこしている。一体何が楽しいのだろうか？

「さて、用件は分かっているね。これはどういふことかな？」

これとは彼女と俺の性交を映した写真だった。こうみると気持ち悪いものだ。あの音はシャッターの音だったに違いない。

「見ての通りだと思うけど？あなたついに頭もいかれたの？」

「何だと！それが俺に対しての口のきき方か？いい加減にしろ。」

「じゃあ、これはどういうこと？」

これは凄い。俺も感心するしかなかった。何十枚もあるがそれが全部違う女なのだ。よくここまで怒らなかったな。女の嫉妬は怖い。

「…お前、知っていたのか？」

まさか、昨日の今日に修羅場を経験するとは思わなかった。

「知ってたわよ。わたしと結婚する前にも5人ぐらいいたでしょ。その中で私を選んだわね。」

「そうか…。しかし、君と離婚はしたくない。今は大事な時なんだ。この噂が会社に知れたらまずいことになる。もう一年か二年我慢してくれないか？」

「大丈夫。手は打ってあるから。」

「それは一体どういうことだ？」

「あなた、別れ方も重要よ。女の怖さはそこから来ることもある。あと、同じ会社の人間に手を出したのは不味かったわね。」

もうこの後は言わなくても分かるだろう？

2人は離婚した。夫は首になったそうだ。今はどうしてるかわからない。

俺との関係性は早い話が夫への仕返しのもりだったのだろう。そのためだけに俺は利用されたのだ。わざわざ、自分で探偵か何かにお願いして…。

それから彼女から誘いを受けて、告白もされたが、それは感情がこもっていないのがよくわかった。すぐに断った。もしかしたら彼女も言わなきゃと感じたのかもしれない。結果的には俺をまきこんだ形になったのだし。

こういった話は世に出回らない。どうしてだかわかるか？男の人はおわかりだろう。プライドが高いからだ。だからこそ、本当にいやな話は男はしない。まあ、俺みたいにする人もいるけどね。それは例外だと俺は思っている。

化けの皮がはがれる。これは人間だけに使われるし、女の人に使われることが多い。化粧をしているからね。いろんな要素があると思うけど、今回はまさに女の人の裏と表を見た。まさに化身。俺自身は間違った行動をとったつもりはなかった。その時はね。冷静に見てしまえば、バカばかり。彼女も浮気を知っていなければ、このようなことをしていないだろう。変えてしまったのは周りの人間だ。そして、それにつられてみんなが少しずつ変わって歯車がくるってくる。まさに“負”の「諸行無常」だ。

このことは俺にはかなりこたえたが、女の人の普段見れないところを見てよかったと思っている。テレビでよく言っている“話しあい”。これをよくしておかないと男女の関係がうまくいかないこともよくわかった。

俺にはいまだに彼女がいない。

まさに草食系。

でも、今は3月。

恋の季節がもうすぐそこまで来ている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0080q/>

化身

2011年1月11日21時09分発行